

長野県木島平村糠千地区における地域づくりの現状と課題

—行政・住民・大学の取り組みに注目して—

馬場千遥*・吉田国光**

*木島平村・地域おこし協力隊, **金沢大学・人間科学系

本稿は、過疎に直面する長野県下高井郡木島平村糠千地区において展開する地域と大学の連携した地域づくりの現状と課題を、地域づくりに関わる各主体の取り組みの来歴や住民の参加状況、主体間の連携のあり方を検討することから明らかにするものである。

木島平村では、1980年代後半から地域住民を中心に、その他に行政や大学などが主体となって様々な取り組みが実施されてきた。そして2010年に農村文明塾が各主体の連携を目的に設立され、住民が学生を受け入れるコンソーシアム事業を軸として3主体は連携を展開してきた。こうした連携事業に対して住民から肯定的意見が聞かれる一方で、取り組みの実施自体が目的化されることを危惧する意見も出ている。今後の課題としては地域づくり全体における実施される各事業の位置づけや、各成果とそれに至るプロセスの可視化を通じて、将来像を考えていくことが求められるといえる。

キーワード：過疎、地域づくり、産学官連携、長野県木島平村

I はじめに

高度経済成長期以降、農山村地域における過疎の進行は社会問題化し、1970年の過疎地域対策緊急措置法を始めとして様々な対策が講じられてきた(西野, 1998)。こうしたなかで、地方自治体や民間企業、NPOなど様々な主体が「地域づくり」¹⁾に取り組みようになった(宮口, 2000)。1970年代後半から1980年代にかけての地域づくりは、主に農山村地域の産業振興を目的とした企業誘致やリゾート開発などハード面の整備が中心であった。しかし多額の投資に対して得られる効果が限定的であったことから、1990年代以降には、農山村の地域資源を活用したサービスなどソフト面を重視したものが注目されるようになった(佐久間ほか, 2011)。近年では、若年者や都市住民など地域外の間が地域住民との交流を通じて地域づくりを行う取り組みも注目されるようになってきた。具体的事例としては総務省の「集落支援員」や「地域おこし協力隊」、農林水産省の

「田舎で働き隊」が挙げられる。

こうしたなかで農山村地域における地域づくりを取り上げた研究も蓄積されてきた。過疎の進行する地域では、集落機能の弱体化や担い手不足、高齢化にともなって生じた様々な問題が発生し、行政が地域づくりに積極的に関わる事例もみられるようになった(岡橋, 1988; 中條, 2003; 作野, 2006)。しかし、行政主導の地域づくりについては、行政の介入が住民自らの取り組み活動を形骸化させたり(金, 2000)、地域住民の関心および主体的な関わりが希薄な状況において進められることから、住民が地域開発の政策決定から疎外される構造を生み出す危険性も指摘されている(吉田, 2007)。

こうした状況から、従来の行政主導から住民自らの力で地域の生活を改善しようとする機運が高まり、地域自治組織を再構築しようとする動きも全国各地でみられるようになってきている(作野, 2006)。夫・金(2010)では、住民組織と行政との関わりについて、住民組織と行政が双方の役割

を調整しつつ対等な関係を築くことで、住民組織が単なる行政の末端機能に留まることなく、地域自治機能を果たしながら行政と対等な立場で地域づくりを行うことが可能になることを示している。また、佐藤（2012）では市町村合併を契機として非営利組織が旧自治体の指針を引継いだ事例を取り上げ、非営利組織の活動と合併に対する住民の危機感が、事業の持続と自立的な活動への移行につながったと示されている。リーダー的人物や行動能力をもった住民組織によって、地域と住民の実態を反映した住民主体の地域振興が行われるという事例も報告されている（筒井，1999；中山，2000）。そして近年では、行政と地域住民だけでなく、「都市農村交流」や「産学官連携」のように都市住民や大学との連携もみられるようになってきた（宮口ほか，2010）。このように住民組織による活動や、高齢者、女性、非営利組織による地域づくりを取り上げた研究が蓄積されてきたが、大学との連携については存在の指摘にとどまり、地域づくりにおける大学の果たす役割や既存の住民団体との関わりについては十分な検討がなされていない。大学における研究成果を社会に還元することが強く求められるようになってきており、今後こうした地域と大学の連携した取り組みは増加することが予想される。

そこで本稿では、過疎に直面する長野県下高井郡木島平村糠千地区において展開する地域と大学の連携した地域づくりの現状と課題を、地域づくりに関わる各主体の取り組みの来歴や住民の参加状況、主体間の連携のあり方を検討することから明らかにする。

木島平村では2010年に木島平村教育委員会内に農村文明塾という組織が設置され、その組織が主体となって様々な地域活性化事業を展開し、それに呼応して住民団体なども様々な取り組みを実施してきた。そのなかの一つとして、木島平村で

は複数の大学と連携事業を実施して、大学が地域づくりに直接的に関わるようになってきており、多様な主体の連携のあり方を検討する上で好適な事例と考えられる。

研究の手順としては、まずⅡで統計や役場提供資料などをもとに研究対象地域の概観を示す。次にⅢで役場提供資料などをもとに木島平村における地域づくりの来歴と、その中心的な役割を担っている農村文明塾が設立された経緯を示す。そしてⅣで農村文明塾に加えて、住民および住民団体、大学といった各主体の諸実践について分析し、Ⅴでそれらの連携のあり方や、地域づくりに果たす各主体の役割について考察し、Ⅵで結論を述べる。なお、事実関係に関する記述について、特段の注記のない場合は聞き取り調査に基づいたものとする。現地調査は2013年8月から12月に実施し、聞き取り調査は農村文明塾事務局員と役場職員、糠千地区住民、大学教職員、大学生へ実施した。

Ⅱ 対象地域の概観

1. 木島平村の概観

長野県下高井郡木島平村は、長野県の北東部に位置し（図1）、南部に高社山、東南部に高標山、東部にカヤの平高原、北部は毛無山系と三方を山に囲まれた中山間地域である。長野県内でも有数の豪雪地帯であり、冬季の積雪は約1.5～2mとなる。樽川や馬曲川の扇状地、標高320～750mの間の谷沿いに集落が立地している。

現在の木島平村は1955年2月に旧穂高村と旧往郷村、旧上木島村が合併したものである。1999年の地方分権一括法の成立以降、全国的に市町村合併が求められるようになった。このような政治情勢のなかで木島平村では2002年、村内各種団体代表者で組織する合併研究会を開催し、周辺市町村との合併についての研究が開始された。2003



図1 研究対象地域

年2月に飯山市・木島平村・野沢温泉村合併研究会を設立し、2004年3月まで1市2村の合併に向けて調整がおこなわれてきた。しかし、住民説明会や住民アンケートをもとに2004年3月の議会で合併は否決され、現在に至っている。

1955年合併当時の木島平村の人口は8,026人であったが、その後は減少傾向にあり、2010年現在では4,939人となっている²⁾(図2)。そのうち65歳以上の高齢者の占める割合は32.2%となり、

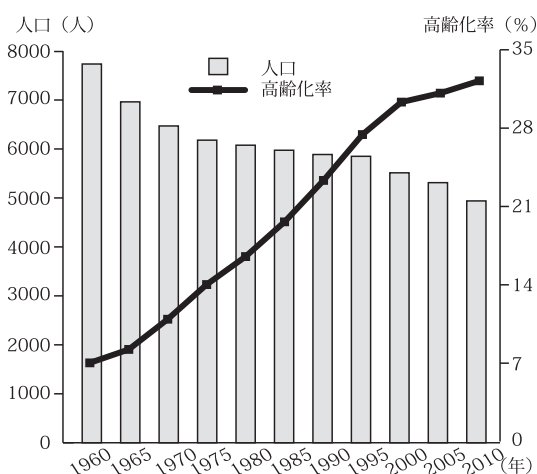


図2 木島平村における人口と65歳以上人口比率の推移

(国勢調査により作成)

全国平均の23.0%、長野県平均の26.5%と比較しても高齢化が進んでいる。また、木島平村の旧往郷村、旧上木島村域は振興山村に指定されている。2005年の振興山村指定地域における65歳以上の高齢者の占める割合は30.5%となっている。2010年4月には、木島平村は過疎法の指定を受けており、山間地域をめぐる全国的課題である過疎および高齢化という傾向に合致している。

木島平村の基幹産業は農業と観光である。主な農作物は米と大豆、アスパラガス、ヤーコン、ズッキーニである。農家数は減少傾向にあり、農業従事者の高齢化も進んでいる(表1)。また観光ではカヤの平高原や、1963年に開業した木島平スキー場、1985年に整備された馬曲温泉が主な観光目的地となっている。しかしスキー場の来場者数は1995年をピークに2013年現在では3分の1にまで減少している³⁾。産業別就業者数をみると、第一次産業で25.8%、第二次産業で22.7%、第三次産業で51.5%となり、同時期の常住地による従業地・通学地については、就業者の44.8%、通学者の77.8%が村外にて就業・就学している⁴⁾。これらのことから、農業や観光業が展開するものの、村内の就業機会は限られており、多くの若年人口が村外へ流出しているといえる。

2. 糠千地区の概観と社会的特徴

本稿で取り上げる糠千地区は、木島平村の南東端、カヤの平高原の西端に位置し、南部は山ノ内

表1 木島平村における専兼別農家数

年度	世帯数	総農家数	専兼別農家数 (戸)				
			販売	自給的	専業	第1種兼業	第2種兼業
1985	1,513	1,082	901	181	172	167	507
1990	1,499	1,036	828	208	188	172	676
1995	1,579	979	745	234	165	195	619
2000	1,576	866	632	234	124	111	397
2005	1,600	783	503	280	116	102	285
2010	1,560	743	422	321	115	60	247

(農林業センサスにより作成)

町に接している（図1）。1944（昭和19）年、千ノ平地区と糠塚地区が合併して糠千地区となった。最も多い時には約70世帯が居住していたが、現在の世帯数は37で、人口112人となっている。65歳以上の高齢者の割合は村全体の平均とほぼ同じ32.4%である⁵⁾。糠千地区は26の地区のなかでも木島平村の中心地から最も離れた山間地に位置し、過疎化と高齢化が深刻な地区とされている。このような状況から、行政側も様々な対策を講ずるなかで、糠千地区は地域づくりをめぐる各種事業のモデル地区に選定された。現在、行政や大学と連携するコンソーシアム事業など様々な取り組みが行われている。

糠千地区の社会組織についてみていくと、地区の代表として区長が位置づけられ、区長の相談役として参与が置かれている。副区長は公民館分館長と兼務し、主事は副区長の職務を補佐する。副区長と会計と主事は選挙で選ばれる。副区長に選ばれた者は、次年度は区長、次々年度は参与を務める。また、区長、副区長、参与の三役は氏子総代も務める。糠千地区の下部組織として五つの組⁶⁾があり、各組長が総務部長、土木部長、農林部長、自治会長、社協支部長のいずれかを務める。それぞれの役職の任期は1年間で、これらの役員は地区行事に原則参加しなければならない。地区行事時と区長が必要と判断したときには役員会が開かれ、参与と副区長、会計、主事、各組長は必ず参加しなければならない。また必要に応じて婦人会長などその他の代表も招集される。地区内のその他の社会組織としては、60歳以上が加入する老人クラブ、小学生のいる世帯で構成される育成会、60歳以下の女性で構成される婦人会がある。

地区の主な行事としては、5月の春祭り、9月の秋祭り、11月の糠千地区文化祭と道祖神づくり、1月の道祖神祭りがある。この他にマレット

ゴルフ大会が年に1～2回開催される。春祭りと秋祭り際には、神楽（獅子舞）⁷⁾が奉納される。神楽については、1970年代まで青年団が担うものであった。若年層の減少にともない青年団自体の運営が難しくなり、神楽の存続も危機にさらされた。しかし、住民たちも神楽の存続に対する意欲を有していたため、青年団の解散後は神楽保存会を設置し、地区のほとんどの青壮年層の男性が保存会会員として神楽に関わっている。地区の夫役としては、春と秋2回の堰普請や下草刈り、獣害対策の電気柵の設置などがあり、原則として1世帯につき1人参加することになっている。

Ⅲ 木島平村における地域づくりの取り組み

1. 多様な主体による取り組み

木島平村（1995, 2005）によると、木島平村では合併以来、1955年に新村建設計画、1968年に第1次木島平村振興計画、1977年に第2次木島平村振興計画が策定され、道路や上水道、圃場整備などの基盤整備や社会資本の整備による物的生活環境の改善が進められてきた。1985年に策定された第3次木島平村振興計画では、「ふるさとに誇りと生きがい求めて」をスローガンに、自主的な住民活動の育成を進めた。こうした動きのなかで、村内では様々な主体が地域振興に向けた多様な取り組みを始めるようになった。

木島平村では、1988年から地域への愛着づくりと美しい環境の創出を目的に「わが村は美しく運動」に取り組み、地区ごとに推進協議会をつくり、村民の地域づくりへの参加意識を高めてきた（国土交通省都市・地域整備局企画課、2005）。1995年に策定された第4次総合振興計画の策定にあたっては、全戸アンケートの実施、各種団体からの意見聴取、地区ごとに懇談会などを実施し、住民の意見を広く取り入れた。この基本計画では「自然劇場きじまだいらーふるさとは子や孫へ

の贈り物」を地域づくりのテーマとし、地区単位の地域づくりの計画も組み込まれた。地区ごとの計画には、地域づくりの方向を簡潔に表現したテーマが全地区で設けられ、これまでに公園や花壇の整備、イベントの開催など数々の住民主体の地域づくりが行われている。この他に農業・自然環境を活かした取り組みが始められた。1994年には農家の有志たちによって化学肥料や化学合成農薬の使用を減らした農作物生産による産地づくりと、ブランド化を図る「有機の里づくり」が始められ、1998年からはカヤの平高原での人間と自然の関わりを課題とした自然観察・体験プログラム「ブナの森自然劇場」など様々な取り組みが実施されてきた。

文化面においては、村民の有志によって組織された「農民芸術ふう太の社」による奥信濃地方で古くから盆踊り等で踊られている烏踊の保存伝承活動などや、小学生から中学生の女子により構成された和太鼓グループ「鬼島太鼓」の活動が展開してきた。この他にも村外との連携について、1985年に姉妹都市盟約締結した東京都調布市や1990年から開始されたルクセンブルクとの交流など、都市農村交流や国際交流も進められている。

このように木島平村では様々な主体により多様な分野にわたる地域づくりが進められてきた。しかし、「個々の取り組みだけでは解決できない課題が生まれており、村全体としての統一感、個別産業の連携、環境との共生など、より総合化、統合化された村全体のグラウンドデザインが求められ」ていた（国土交通省都市・地域整備局企画課、2005）。そのなかで2004年に、国土交通省の「多様な主体の参加と連携による活力のある地域づくりモデル事業」に「都市と農村の連携による日本農村文化再生塾の設立を目指して」⁸⁾が採択された。この事業のなかで、村内の各種団体を取りま

とめるとともに、地域づくりのシンクタンク・アドバイザー機能を持った組織として「日本農村文化再生機構」の設立を計画した。これが後述の「農村文明塾」の原案となり、「農村文化・環境再生検討委員会」を経て、「農村文明塾」に展開していった。

2. 主体間の連携による地域づくりの展開

2005年に第5次総合振興計画（2005～2014年）が策定され、この計画の目標である「ほっと・もっと・ずっと 自然劇場木島平」の実現に向けて、様々な関係機関が連携し、官民一体となって取り組むための推進組織として2008年10月、「木島平農村交流型産業推進協議会」（以下、協議会）が設立された。この協議会は「木島平村の持つ資源や農村空間の魅力を活かし、農業の高付加価値及びブランド化を図るとともに、農業体験や農山村文化体験等の多様な観光メニューの創出やインターネットによる交流人口の拡大を図り、地域経済の活性化とブランド形成を図る」⁹⁾ことを目的としている。

協議会の構成団体は木島平村役場、木島平村議会、農業委員会、観光協会、商工会、木島平観光株式会社、北信州みゆき農業協同組合、北信農業改良普及センター、農業振興公社である。これらの団体が連携して五つの部会¹⁰⁾を設置し、具体的な取り組みを進めてきた（表2）。その一つの部会として「農村文化・環境再生検討委員会」¹¹⁾が設けられた。

2009年に「木島平“村格”形成による農村・都市共生プロジェクト～昔話の里から農村文化・環境の再生～」が内閣府「地方の元気再生事業」に採択された。この事業は「学」との連携による「農村文化・環境再生塾」の開設と、「農山村交流全国フォーラム in 木島平」の開催を主なプロジェクトとしたものである。そして、「農村文

表2 農村交流型産業推進協議会の各部会と主な取り組み

部会	主な取り組み
農業ブランド化部会	農作物の高付加価値、新製品開発、ブランド形成
地元食文化推進部会	郷土料理・地元食の提供促進・拡大
農村体感型交流推進部会	農村空間体験型観光の推進、都市との交流
い〜なか交流館運営委員会	インターネットの活用による交流人口の拡大、特産品の販売促進
農村文明塾運営委員会	農村文明の創生に向けた調査・研究と普及啓発、人材育成、シンクタンク機能
木島平米プロジェクト会議	品質・技術の向上、知名度向上と販路の拡大、地産地消の推進

(役場提供資料により作成)

化・環境再生塾」のプレ講座として後述する金沢大学の「まちづくりインターンシップ」と、早稲田大学の「プロフェSSIONALZ・ワークショップ」を実施した。これらの大学と連携した事業には、オブザーバーとして近隣の長野県立下高井農林高校の学生も参加した。

2009年10月に木島平村が主催者となって「農山村交流全国フォーラムin木島平」¹²⁾が開催され、「農村文明」という新たな価値観が提唱された¹³⁾。「農村文明」¹⁴⁾とは、安田喜憲氏の「稲作漁撈文明」、総務省の椎川忍氏が提唱していた「緑の分権革命」と芳川村長が以前から構想していた「農村文化・環境再生」などのキーワードを基盤として作られた新たな概念である(安田, 2009; 椎川, 2011)。そして2009年度に「農村文明」の創生を支える機関として「農村文明塾」の開設に向けて調査・検討が行われ、2010年2月に「農村文明塾運営委員会」が発足し、同年3月「農村文明創生プログラム」が策定され、「農村文明塾」が設立された。

IV 地域づくりの諸実践

本章では、農村文明塾と地域づくりのモデル地区として様々な取り組みを実践している糠千地区、糠千地区で活動する金沢大学と早稲田大学の取り組みについて検討する。

1. 農村文明塾の取り組み

2009年に木島平村教育委員会生涯学習課内に

設置された「農村文明塾」は、「農村文明」の創生を図るための人材育成・調査研究機関である(木島平村農村交流型産業推進協議会, 2010)。元早稲田大学総長の奥島孝康氏を塾長とし、長野県知事を名誉顧問、大学教員、経済ジャーナリスト、総務省地域力創造審議官、俳優、絵本作家らによって有識者顧問団が構成されている。有識者顧問らにより農村文明塾の運営等に関する助言や提言が行われ、農村文明塾事務局が実際に事業を進めている。農村文明塾事務局は2009年農村文明塾設立当初には教育委員会の職員2人とアドバイザーとして外部から招かれたコンサルタントの3人で構成されていたが、業務が拡大するにともない、役場職員を増やしたり地域おこし協力隊¹⁵⁾を配置したり数回にわたって再編された。2013年12月現在、農村文明塾事務局員は農村文明塾総合コーディネーターとしてコンサルタント1人、事務局長として教育委員会の職員、事務局員として教育委員会の職員2人と地域おこし協力隊5人で構成されている。2012年までは木島平村公民館内に教育委員会とともに事務所を構えていたが、2013年からは廃校となった小学校の校舎を改装した研修宿泊施設である「農村交流館」に移転した。農村文明塾の運営資金源は国の機関からの助成金や交付金、一部民間財団をもとにしている(表3)。

人材育成機能の展開として、「農村版大学コンソーシアム」や「農村学講座」、「村民研究員制度」、その他のプロジェクトが行われている。農

表3 農村文明塾による主な事業展開

年度	事業主体	事業名	事業費(円)	主な用途
2010	長野県	地域発 元気づくり支援金事業	1,100,000	農村学講座
	総務省	過疎地域等自立活性化推進交付金	9,218,000	農村学講座、農村文明塾全体の事業推進、コーディネーターの賃金
2011	総務省	過疎地域等自立活性化推進交付金	10,000,000	農村学講座、農村文明塾全体の事業推進、コンソーシアム、コーディネーターの賃金
	総務省	過疎地域等自立活性化推進交付金	9,884,000	農村学講座、農村文明塾全体の事業推進、夏季コンソーシアム、コーディネーターの賃金
2012	総務省	「域学連携」地域づくり実証研究事業	250,940	金沢大学との連携推進
	文部科学省	「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」における実証的共同研究モデル事業	1,097,563	秋季および冬季コンソーシアム
2013	岡自治総合センター	シンポジウム助成事業	2,700,000	第1回全国村長サミット in 木島平
	総務省	「域学連携」地域活力創出モデル実証事業	15,000,000	コンソーシアム、コーディネーターの賃金
	長野県	地域発 元気づくり支援金事業	3,200,000	第2回全国村長サミット in 木島平

(農村文明塾提供資料により作成)

村版大学コンソーシアム¹⁶⁾ 木島平校（以下、コンソーシアム）とは、様々な大学の学生を木島平村に呼び、農山村に関連する分野の大学教員らによる講義、地域住民や学生同士との交流、体験を通じて、農山村の「環境」や「暮らし」、「産業」を体感することで、農山村に対する理解を有した地域に必要な人材を育成することと、地域づくりを進めることを目的としている。この取り組みは2010年から開始され、夏季講座と冬季講座、秋季講座の年3回実施されている（表4）。

夏季講座は、夏休みを利用した4泊5日もしくは5泊6日のプログラムとなっており、大学教員らによる講義を受けたり、住民への聞き取り調査などのフィールドワークを行ったりしている。2012年度までのプログラムはフィールドワークとそれを踏まえた提案に留まっていたが、2013

年度からは、5泊6日のプログラムを4回、計24日という長期に渡るプログラムとなっている。フィールドワークから事業提案、そしてその実現までを念頭に展開され、実際の取り組みとして遂行されたものもある。

秋季講座は2012年度より開始され、糠千地区における道祖神づくりが中心的な内容となっている。その他に、後述するものずき会による炭焼き体験や「集落カフェ」¹⁷⁾による高齢者や子どもたちとの交流が行われる。農村文明塾は、学生の来訪や再訪を促すため講座を定期的実施したいと考え、秋季にもなにか実践できないかと糠千地区の役員会で相談したところ、道祖神づくりとものずき会による炭焼きが提案された。

冬季講座は、雪かきボランティアを中心的な内容とし、この他に集落カフェやスノーキャンドル

表4 コンソーシアムの内容

年度	講座	期間	内容	地区
2011	夏季講座	4泊5日×2期	集落調査、提案、集落カフェ、民泊、交流会	糠千
	冬季講座	1泊2日	雪かきボランティア、交流会	糠千・馬曲
2012	夏季講座	5泊6日	集落調査、提案、集落カフェ、交流会	糠千
	秋季講座	1泊2日	道祖神づくり、炭焼き体験（ものずき会）、交流会	糠千
2013	冬季講座	2泊3日	雪かきボランティア、スノーキャンドルづくり、集落カフェ、交流会	糠千
	夏季講座	5泊6日×4期	集落調査、提案、実践、集落カフェ、民泊、交流会	糠千・内山
	秋季講座	1泊2日	道祖神づくり、集落カフェ、交流会	糠千
	冬季講座	2泊3日	雪かきボランティア、スノーキャンドルづくり、集落カフェ、交流会	糠千

(農村文明塾提供資料により作成)

作りを通じた高齢者や子どもたちとの交流も行われている。2010年から「早稲田大学プロフェッショナルズワークショップ」(後述)を契機に始まった雪掘りワークショップを木島平村総務課で行っていたが過重負担となっていた。農村文明塾としては、来訪者を増やしたかったため、農村文明塾でこのイベントも引き受け、コンソーシアムのプログラムとして組み入れることになった。

コンソーシアム参加者の募集は有識者顧問や農村学講座等を務める大学教員やコンサルタントの知人を通じて首都圏の大学に向けて行っている。早稲田大学や武蔵大学、昭和女子大学、東京工業大学、東京農工大学、宇都宮大学、茨城大学など参加大学はこれらの大学の学生に加えて、金沢大学の学生も多く参加している。金沢大学からの参加については、後述する金沢大学の「まちづくりインターンシップ」が契機となっている。2回以上参加するリピーターが多く、また大学を卒業して社会人となった後も「OB・OG」として参加する者もある(図3)。大学コンソーシアムのほか、企業を対象とした農林保全活動や農村文化の体験を行う「企業コンソーシアム」や小規模自治体の

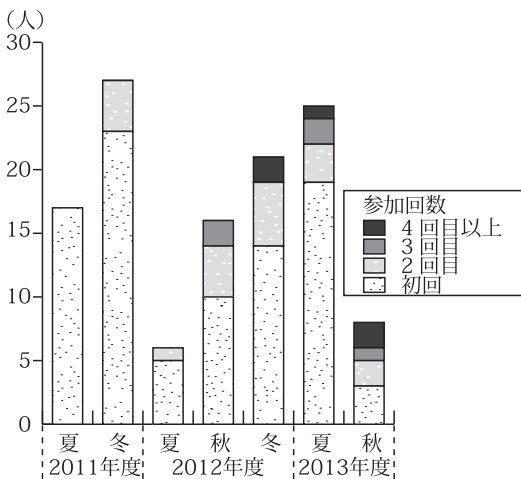


図3 コンソーシアムの参加者数
(農村文明塾提供資料により作成)

首長や職員のための政策研修を行う「行政コンソーシアム」も構想されている。

この他の「農村学講座」や「村民研究員制度」は、木島平村の村民や村外の農村に関心のある人を対象とした取り組みであり、村民らが木島平村について学び、実践につなげていくものである。農村学講座は、地域の生活や生業を学び、地元に愛着や誇りをもってもらうことを目的として開催されている。様々な分野の講師を招いて農山村に関する講義や実践報告、現地研修のほか、講師と参加者による交流会も行われている。2010年から毎年、様々なテーマで年間5回にわたって実施されている(図4)。テーマによって参加者数やその割合に差はあるが、退職して時間に余裕ができた木島平村民や、Iターンで木島平村や周辺市町村に移り住んだ農村に興味のある人などが参加している。また、自地域に対する理解促進のため役場職員の参加も奨励されることから、参加者の割合として高くなっている。農村文明塾としては、若い世代の木島平村の住民にも多く参加してもらいたいと考えている。

村民研究員制度とは、村民の趣味や特技を磨き、地域づくりに活かすことを目的とし、将来的には趣味が実益に結び付くことを念頭においた取り組みである。2013年現在、約20名の研究員がおり、約2カ月に1回のペースで交流会が行われている。研究員の視察活動には農村文明塾から補助金が支給され、これまでに群馬県や新潟県、埼玉県などで現地視察が行われた。

その他にも、木島平村の抱える課題を村民だけでなく都市住民を含め村外民に関心を持ってもらい、村民と村外民の協働により課題解決を進めることを目的とした三つのプロジェクトを実施している。その一つに後述する早稲田大学のワークショップでの提言を受けて開始した「棚田再生プロジェクト」が挙げられる。このプロジェクトは

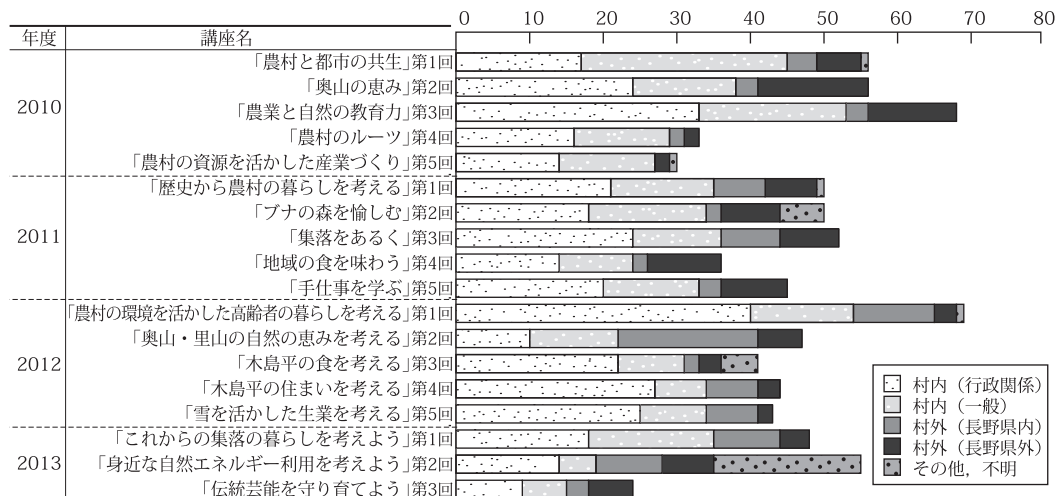


図4 農村学講座の参加者数とテーマ

（農村文明塾提供資料により作成）

早稲田大学の学生と地元の地権者や農業関連団体と取り組んでいる。また2012年7月には、自治体としての村の存続を図るために全国の村との連携を築くこと目的とした「全国村長サミット」が開催され、北海道から熊本県までにわたる計11道府県の46カ村が参加した。2013年11月には「第2回全国村長サミット」が行われた。

2. 糠千地区住民による実践

糠千地区において地域づくりを展開する主体の一つに50歳代後半から60歳代の糠千区民によって構成される「ものずき会」という任意団体がある。2004年に糠千区民の一部が、古くから集落内で栽培されていたソバの活用策を練るために発足し、その後、次第に活動内容の幅を広げていった¹⁸⁾。2013年12月現在、主な活動として挙げられるのは、ソバ栽培とそれを利用した「糠千そばまつり」の開催と、炭焼きである。

ソバ栽培は、糠千地区で問題になっていた耕作放棄地の利用方法を検討した結果、比較的少ない労力で栽培可能であったことから始められた。も

のずき会のリーダー的存在となっている人物が定年退職を機にソバ打ちを学び、食品衛生責任者の資格を取得し、2007年からもものずき会が「糠千そばまつり」を主催するようになった¹⁹⁾。「糠千そばまつり」は、糠千地区の西端に位置する樽滝が毎年5月8日の1日だけ落水するのに合わせて開催され²⁰⁾、滝の見物客をターゲットに糠千公民館でものずき会の会員が中心となって手打ちソバを販売している²¹⁾。また秋にはその年に得られた新ソバを使用し「新そばまつり」が行われる。2011年からコンソーシアムが開始されたのを契機に、2012年以降の「そばまつり」から学生も手伝っている。

炭焼きは糠千地区でも1955年から1960年ごろまで生業の一つとして行われていたが、炭の需要が減少し次第に行われなくなった。しかし、区民の「このまま技術を途絶えさせるわけにはいかない」という思いから、ものずき会の会員が炭焼きの経験のある80歳以上の区民に技術を学び、自分達で炭焼き小屋を復元し、秋には炭をJAに出荷している。この他に、竹細工や山菜採りなど

様々な活動を行ってきたが、最近は会員の高齢化によって中止されたものもあり、年2回の「そばまつり」を中心とし、炭焼きなど他の活動は低調になりつつある。ものずき会の会員は「糠千区民なら誰でも」としているが、50歳代後半から60歳代の男性に偏っている（表5）。ものずき会が結成される以前、現在のものずき会の中心会員よりも少し若い世代で構成される「一陽会」という組織があった。キノコ栽培や文化祭でおでんの販

売を行っていた。キャッチフレーズは「キノコを作ってハワイに行こう」とされ、キノコ栽培や文化祭でのおでん販売などの収益を積み立て、それがある程度の金額になれば、一陽会会員に限定せず区民全員での旅行を計画していた。しかし現在では活動しておらず、地区内で地域づくりを展開する住民団体はものずき会のみとなっている。

糠千地区において全区民が関わる地域づくりの主な取り組みとして、コンソーシアムの受け入れ

表5 糠千地区における住民の各取り組みへの参加状況（2013年12月）

番号	性別	年齢	単身	秋祭り	ものずき会		農村版大学コンソーシアム木島平校						域学連携 (金沢大学)		視察 (女性限定)		
					会員	そばまつり	2011年度		2012年度		2013年度		集落 カフェ	視察	学園祭	長野	秋田
							夏季	冬季	夏季	秋季	冬季	夏季					
1	M	90	※	○													
2	M	80		○													
3	M	80	※	○													
4	F	80		○													
5	M	80		●					○子	◎		○子					
6	F	80	※	○									○				
7	F	70	※	○									○				
8	F	70	※	○									○				
9	M	70		●			○		○		○子			○子		○妻	
10	M	60		※	◎	◎	◎	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
11	M	60		●	※	◎	○	○	○			○	○			○妻	○妻
12	M	60		○			○										
13	M	60		●	※	◎	○	○	○	○	◎	○		○	○	○妻	○妻
14	M	60		●	※	◎	◎	○	◎	◎	◎	○	○母	◎	◎	○妻	○妻
15	M	60		●	※	◎	○	○	◎	◎	◎	○		○	○	○妻	○妻
16	M	60		●	※	○	○	○	○	○	○	○		○			
17	F	60	※	○									○				
18	M	60		●	※	◎	○	○	○	○	○	○		○		○妻	○妻
19	M	60		●	※	○	○	○	○	○	○	○	○母	○	○		
20	M	60		●	※	○	○	○	○	○	○	○	○母	○	○		
21	M	60		●	※	◎	◎	○	◎			○	○	◎	○	○妻	○妻
22	M	50		●		◎	○	○	◎	◎	◎	○		○	○	○妻	○妻
23	M	50		●			○	○	○			○					
24	F	50		○			○										
25	M	50	※	●		○	○	○	○	○	○	○		○	○		
26	M	50		●			◎	○	○	○			○母				
27	M	50		●								○	○				
28	M	50		●	※	○	○	○	○	○	○	○					
29	M	50		●		○		○	○			○	○母				
30	M	50		●			◎	○				○					
31	M	40		●		○			○	○	○	○		○			
32	M	40	※	●			○	○				○					
33	M	40		●								○					
34	M	30		●			○母					○					
35	M	30		●	※父	◎						○					

※:「単身」,「ものずき会」に該当する世帯

○:世帯主が参加,◎:夫婦での参加

- 1) 秋祭りの項目については○:参加,●:神楽保存会として参加。
- 2) ○横の特別な明記は世帯主からみた続柄の者が参加。
- 3) 年齢については個人情報保護の観点から10歳代で区切って表記した。

(農村文明塾提供資料,聞き取り調査により作成)

がある。コンソーシアムを受け入れた経緯については、2011年初めに農村文明塾の事務局からコンソーシアム夏季講座の説明と協力地区の募集があった。とくに、糠千地区と馬曲地区には「できれば中山間地区である糠千地区か馬曲地区で行いたい」と提案を受けており、他に立候補する地区がなかったため、糠千地区で引き受けることになった。これを契機に、それ以降のコンソーシアムも糠千地区で行われるようになった。年に数回開かれる糠千地区の役員会で農村文明塾の事務局が事業内容を説明し、区長を通じてコンソーシアムの日程や内容、参加呼び掛けが全戸に回覧板を通じて周知される。

夏季講座では、区民たちが入れ替わりで学生が活動を行っている公民館へ様子を見に行ったり、学生たちのフィールドワークでの聞き取りに応じたり、民泊を引き受けたりしている。秋季講座の道祖神づくりや冬季講座の雪かきでは、学生たちを指導しながらともに作業を行う。いずれの講座においても夜には交流会が行われ、糠千区民と学生、および学生同士の最大の交流の場となっており、そこでの会話が発端として新たな取り組みが行われることもある。現在はほとんどの取り組みにおいて農村文明塾からの指示を受けて動いているが、農村文明塾側も地区からの要望が出るようになればそれをコンソーシアムに反映させたいと考えている。コンソーシアムで必要な経費²²⁾は基本的に農村文明塾から出資されるが、事業が発達になったことを受けて、2013年度には糠千地区の予算に「コンソーシアム費」が組み込まれることになった²³⁾。

コンソーシアムへの糠千区民の参加状況については、ものずき会の会員に偏っている(表5)。また行事ごとにみると、同じコンソーシアムでも、夏季講座や冬季講座に比べて秋季講座の道祖神づくりではものずき会の会員、非会員を問わ

ず、区民の参加率は高い。これは、道祖神づくりが従来から地区行事として位置付けられていたものであることが要因といえる。このため、住民たちは「仕事を休んででも出なければならない」という意識がある。これは、既存の地区行事である秋祭りの参加率の高さからも同様である。それに対してコンソーシアムの夏季講座と冬季講座は新たな行事であるため、「仕事があるからいけない」という人もみられる。

地区の総会や道祖神づくり、堰普請など地区行事について、区民の多くは「各世帯で1人出ればいい」と考えている。コンソーシアムについても、各世帯で1人ないし、世帯主の妻が婦人会として手伝いに参加するにとどまっておき、とくにものずき会会員の妻が多い。

また、70歳代以上の高齢者は公民館まで様子を見に来たり、夜の交流会に参加したりすることは難しい。しかし高齢者も、集落調査の際には学生の聞き取り調査に応じたり、老人クラブからの呼び掛けにより集落カフェへ参加したりして交流している。夏季講座では神楽保存会によって秋祭りで奉納される神楽が披露される。また、2012年度の冬季講座でのスノーキャンドル作りと、2013年度の秋季講座の餅つきは、育成会の協力も得て糠千地区の小中学生と大学生がともに行われた。子どももコンソーシアムに参加するようになっている。このように老人クラブや婦人会、育成会、神楽保存会など、地区の社会組織を基にしたコンソーシアムへの関わりもある。

農村文明塾から糠千地区と金沢大学による「域学連携」協定の提案を受けて、2013年1月、糠千地区の女性3人を含む住民13人が金沢市の視察研修を行った。金沢大学教職員らとの懇談会や大学キャンパスの見学のほか、糠千地区とほぼ同じ人口規模である金沢市東原地区を訪れ、直売所や堆肥作りの取り組みなどを視察した。2013年4月、

糠千地区と金沢大学地域連携推進センターで「域学連携」協定が締結された。この協定を契機に学生の受け入れ組織「清流の郷委員会」が農村文明塾からの提案を受けて発足した。この組織は子どもから高齢者まで、糠千地区の全区民が会員とされている。

このような状況であるが、農村文明塾は女性の参加をさらに促したいと考えている。そのため農村文明塾は、糠千地区の女性を対象に2013年4月に長野県大鹿村の農家レストランの視察を実施した。2013年10月には、数年ぶりに村民運動会に出場した。地区ごとに様々な種目で争う村民運動会では、種目ごとに年齢や性別の制限があり、若い世代が少ない糠千地区は出場を辞退していた。コンソーシアムで糠千地区を訪れたことのある学生たちが糠千区民として参加することで、数年ぶりの出場が果たせた²⁴⁾。2013年12月には再び女性を対象として秋田県仙北市の農家民宿と餅バイキングの視察が実施された。しかし視察の参加者はものずき会の会員の妻が中心となっていた²⁵⁾。

3. 大学との関わり

本節では、コンソーシアム以外の取り組みも行っている金沢大学と早稲田大学の連携事業について検討する。

1) 金沢大学の取り組み

金沢大学と木島平村との交流は、木島平村が金沢大学地域創造学類地域プランニングコース2年次の必修科目である「まちづくりインターンシップ」の受け入れ先となったことを契機としている。「まちづくりインターンシップ」(以下、インターンシップ)とは、2年次の夏休み期間に3～5人のグループで約2週間にわたって、市町村役場の地域活性化やまちづくりに取り組んでいる部門、あるいは中心市街地の活性化や住民参加のま

ちづくりに取り組んでいるNPOなどの団体で実際の仕事に参画し、地域の現場の課題と取り組みを体験的に学ぶという実習形式の科目である。木島平村が受け入れ先となったのは2009年からである。これは、金沢大学の教員が大学の広報活動のために近隣の飯山北高校を訪れた際、その教員に地域づくりに積極的に取り組んでいる地域として木島平村を紹介されたのが契機となっている。

2009および2010年度のインターンシップの受け入れ先は木島平村教育委員会生涯学習課で、活動内容はフィールドワークや聞き取り調査をもとにした木島平村の歳時記や修学旅行のプラン作成、活性化に向けての提言などであった。2011年度のインターンシップから木島平村教育委員会内の農村文明塾が受け入れ先となり、コンソーシアムに携わるようになった。インターンシップの活動内容は、コンソーシアムの運営側として文明塾の事務局員の補佐を務めるとともに、参加学生のリーダー的存在となって他大学の学生をまとめ、運営側・参加者と二つの立場からコンソーシアムを参与観察し、事業を評価し提言を行うといった内容である。

学生たちはインターンシップ以降も農村文明塾の呼び掛けにより、その後のコンソーシアムに参加している。コンソーシアム以外にも、前述したものずき会主催「糠千そばまつり」の手伝ったり、2011年10月にはインターンシップで村を訪れた学生が大学のサークル仲間とともに馬曲地区と糠千地区で弦楽四重奏のコンサートを行ったり、交流を重ねている。

このような交流の広がりをもとに、農村文明塾側から集落と大学とで連携協定を結ぶ提案がなされるようになった。そして2013年4月に、金沢大学地域連携推進センターと糠千地区による域学連携協定が結ばれた。木島平村はその取り組みを後

見し、サポートしている。協定期間は3年間とし、期間の延長については地域連携推進センターと糠千地区で協議の上で決定することになっている。現在の連携状況として、1～2カ月に1回、木島平村か金沢大学のいずれかで農村文明塾の事務局職員と金沢大学の教職員、学生とで協議会を行っている。2013年11月には金沢大学の学園祭で糠千地区の住民13人とこれまで木島平村または糠千地区に訪れたことのある教員と学生が模擬店でソバを販売した。2013年12月現在、協定締結から9カ月が経過し、調整が中心となっていたものだったが、来年度以降からはより実践的な取り組みが計画されている。

2) 早稲田大学の取り組み

2009年4月、木島平村村長と村役場総合政策課課長が早稲田大学を訪問し、早稲田大学と木島平村の交流事業を提案した。翌月、早稲田大学から木島平村へ「プロフェッショナルズ・ワークショップ」の実施を提案し、木島平村はこれに合意した。

このような合意形成がなされた背景には、早稲田大学の地域と教育に対する考えと、木島平村とその村長の持つ村の将来像との一致がある。村長が早稲田大学を訪問する以前に、村長が現在の農村文明塾塾長である奥島氏の講演を聴く機会があった。奥島氏は「学生は地域に出て、現場で学ぶ」ということに早くから着目してきた。木島平村では、2004年頃から、大学と高校、都市住民との連携構想があり、村長の持つ「学生が村に来て活動し、農村について学ぶ」というイメージと奥島氏の講演が重なり、早稲田大学を対象に提案したのである。早稲田大学としては、単なるボランティアや労働力として学生を地域に送るのではなく、「地域が教育の舞台となる」という早稲田大学側の思想を村長が理解したことから合意に至った。

「プロフェッショナルズ・ワークショップ」とは、早稲田大学社会連携推進室が主体となって進めている実践型社会連携教育プロジェクトで、「企業（社会人）と大学が共通する一つの目的を持ってプロジェクトを遂行する」というコンセプトのもと、2007年8月から始められた産学官連携の新しい取り組みである。2009年8月、木島平村役場総務課が受け入れ先となって第1回木島平村プロフェッショナルズ・ワークショップが実施され、10月には「農山村交流全国フォーラム in 木島平」での発表も行われた。また、その後学生たちから「村に再訪する機会がほしい」、「雪を体験してみたい」という要望を受けて、2010年2月に雪掘りワークショップが行われた。この雪掘りワークショップは、2010および2011年度も行われ、前述したように2012年度からは農村文明塾のコンソーシアムに組み込まれることになった。

その後プロフェッショナルズ・ワークショップは毎年実施され、2013年度で第5回目を迎える。これまで対象となった地区は馬曲地区と平沢地区、糠千地区、原千地区²⁶⁾、内山地区で、ともに人口減少と高齢化が著しい地区である。約15～20人の参加学生は地区別のグループに分かれ、事前準備や村内でのフィールドワークを実施し、担当地区の概況調査や問題点の把握を経て、木島平村役場職員や地区の住民とともに地区の活性化につながる提案を導きだす。ワークショップの最後には地区住民への報告会も行われ、実現性、実効性について厳しく指摘されることもあったが、これまでに学生の提案が発端となり、先述した「棚田再生プロジェクト」が実現している。早稲田大学の木島平村以外でのプロフェッショナルズ・ワークショップのほとんどが企業を対象としたもので1回のワークショップで完結するのに対し、木島平村でのプロジェクトは地域を対象とし、ワークショップ後も農村文明塾の開催するコ

ンソーシアムに参加したり、村内の祭や村民運動会に参加したりと、継続的に関わりをもつ学生が多い。

この他の早稲田大学と木島平村の連携として、プロフェッショナルズ・ワークショップの木島平プロジェクトを担当している社会連携推進室職員の紹介を契機に2012年から早稲田大学のサークル「Enactus Waseda」が木島平村で活動を開始した。「Enactus Waseda」は、アメリカミズーリ州に本部を置く国際非営利団体Enactusの早稲田支部で、ビジネスを通じて社会的な課題の解決に取り組んでいる。現在、村が買収した旧デルモンテ工場跡地を利用した農業の6次産業化施設整備に関する企画提案を産業建設課と取り組んでいる。この学生たちもEnactusの活動以外にもコンソーシアムに参加するなど、複数回にわたって村を訪問している。

また、プロフェッショナルズ・ワークショップやコンソーシアムで木島平村を訪れ、その後何度か来村している学生たちが中心となって、今後も継続的に村に学生を呼ぶためのサークルが新たに設立されている。

V 地域づくりをめぐる諸主体の役割

前章では、農村文明塾と糠千地区、大学のそれぞれの取り組みを検討してきた。本章では、各主体のおかれた状況や取り組みが、糠千地区の地域づくりにいかなる役割を果たしてきたのかを検討する。

地域と大学との関わりについては、金沢大学と糠千地区の域学連携協定が挙げられる。また、コンソーシアム等を通じて学生と地区住民との人間関係も構築された。農村文明塾としては、金沢大学との交流事業をより活発にしたいと考えていたため、この協定を提案した。また農村文明塾のコンサルタントは、個人々が地域づくりに関わるた

めには大きい自治体単位でなく、地区単位で地域活性に取り組むことが必要であると考えているため、木島平村ではなく糠千地区と金沢大学との連携協定を提案した。金沢大学としても、今後もインターンシップをはじめとする多様な取り組みを継続的にやりたいと考えていたため、農村文明塾からの提案に合意した。また、地域連携推進センターと協定を締結したことについては、大学の様々な分野の教員に木島平村というフィールドを利用してもらうためにはインターンシップを開講する地域創造学類に限らず、全学を対象にした部局が適切と判断したためである。さらに、これまでの地域連携推進センターの取り組みが石川県内に偏っていたため、県内に限定せず様々な意欲のある市町村と連携を拡大して行くためでもある。

糠千地区ではこの連携協定を契機に、「清流の郷委員会」が設置された。この組織が発足した経緯について、まず第1には、農村文明塾や大学との連携を円滑に進めるためである。それまでは区長が中心となって農村文明塾と糠千区民との連絡係となっていたが、区長は毎年交代することから、継続的な連携事業を行うためには窓口を固定する必要があったためである。第2には、任意組織であるものずき会を行政関連機関である農村文明塾が直接支援することは法的に様々な障壁も存在するため、ものずき会とは別の糠千区民が全員対象となる新たな組織が必要となったためである。しかし現段階では、コンソーシアムや金沢大学学園祭などへの参加はものずき会会員が中心となっている。農村文明塾の立場としては、地区全体の活性化を企図していることから、参加者がものずき会に偏っている現状を課題としている。このような状況から、農村文明塾は2013年の糠千地区役員会の際に、糠千地区に対して二つのことを要望した。第1には、できるだけ多くの区民に参加してもらうこと、第2には、ものずき会を糠

千地区から支持・信頼される組織にすることである。

糠千地区において、コンソーシアムの参加者がものずき会会員に偏る要因として、ものずき会の構成の中心となっている世代は定年を迎えて時間に余裕があることが理由の一つとして挙げられる。このような世代は余暇時間の過ごし方や趣味の一つとしてもものずき会の活動やコンソーシアムでの交流事業に参加している。しかし、それよりも若い世代は仕事や子育てで余暇時間が少ないため、地域活性化の取り組みに積極的に関わることは難しい。

これらの要因から、学生との交流事業はものずき会会員が中心となり、結果的にもものずき会の活動がより目立つようになっている。一部の区民にはコンソーシアムなどの交流事業がものずき会と学生の交流のように捉えられ、ものずき会非会員が参加しにくくなっているということも推察される。ものずき会会員の協力がなければ、いずれの取り組みも始まらなかったが、このような問題が表面化し、農村文明塾からも指摘されることで、ものずき会の会員自身も自分達の組織が地区を分断するものになりうると思える者も出てきており、自らの活動に対する意欲を減退させるものともなっている。このような状況をうけて農村文明塾も対策を講じ、2012年度のコンソーシアム冬季講座から老人クラブや育成会が関わるようになり、高齢者や子育て世代、子どもの参加も増え、参加者の幅は広がりつつある。

糠千地区住民は「学生が来ている時は地区が少しにぎやかになる」、「学生が来るようになって地区内での話題が増えた」と、学生が地区に訪れることを肯定的に捉えている。また、「これだけ続けて学生が来るのだから、この地区はそれだけ魅力があるのだろう」と地区に対する自信につながっていると考えられる。一方、「学生との交流

は楽しいが、この事業を通じてこの地区をどうしたいのかが見えてこない」、「ただ交流するだけでなく、何か具体的な成果がほしい」と、この事業を疑問視する声も出ている。これについては、地区の活性化という目標が掲げられているものの、いかなる状態に到達すれば地域活性化が達成されているのかといった点が不明、もしくは三つの主体で共有されていないことが要因にあると考えられる。

こうしたなかで、事業報告書などで可視化されにくい成果も積み重ねられている。糠千地区で行われた弦楽四重奏コンサートも学生の村民運動会の参加も金沢大学学園祭でのソバ販売も、学生と糠千区民との交流会での会話から生まれたアイデアである。この他に、学生が区民の結婚祝いをしたり、糠千区民が学生の所属するサークルの演奏会に訪れたりするなど、事業以外での個人的な交流もみられる。リピーターの学生たちは帰省するような感覚で村を訪れ、地区住民は子どもや孫のように接している。このような取り組みの積み重ねから、地域づくりにおいて農村文明塾が一定の役割を果たしていると考えられる。

これらの取り組みの他地区への拡大については、コンソーシアムや「そばまつり」などの様子が村内のケーブルテレビで村内の全世帯に放映されたり、村の広報誌に取り上げられたりしているため、木島平村全域での糠千地区での取り組みの知名度は高まっている。また、2013年度の第1回農村学講座で清流の郷委員会会長が「大学との連携を通じた地域づくり」というテーマで実践報告を行った。他地区の住民から「自分の地区でも学生を受け入れてみたい」という声も挙がっているという。農村文明塾としては、まずは糠千地区でモデル地区としての成果を出し、同様の取り組みを他地区にも広げていきたいと考えている。

VI おわりに

本稿では、長野県木島平村糠千地区における地域づくりが展開してきた仕組みを、その推進主体である農村文明塾を中心とした行政と地区住民、大学がどのように取り組み、それらの関連性について分析することから明らかにしてきた。

木島平村では、1980年代後半から地域住民を中心とした様々な主体による地域づくりが行われており、それらの連携を目的に2008年に木島平農村交流型産業推進協議会が設置された。2010年には農村文明塾という組織を設立し、地域づくりに取り組んできた。農村文明塾の様々な取り組みのなかでも対象地域として取り上げた糠千地区における住民が学生を受け入れて取り組むコンソーシアムでは、地区住民と学生の交流が生まれ、学生はリピーターとして継続的に訪れるようになり、金沢大学と域学連携協定の締結に至った。その他にも様々な取り組みに発展したものもみられる。このような成果が出されている一方で、コンソーシアムの参加者に偏りが生じていることが課題とされている。地区の活性化を目的として活動しているはずの住民団体が地区を分断する可能性も有している。農村文明塾としても老人クラブや育成会を通じて高齢者や子育て世代、子どもを事業に巻き込むなど対策を講じることで、懸念される課題は少しずつ改善されており、参加者の幅も徐々に広がりつつある。集落カフェでは高齢者が学生と交流し、交流会では婦人会の女性たちが手伝い、子どもがコンソーシアムに参加することで子育て世代も興味をもつようになる、というような役割分担ができつつあると考えられる。地区住民の全員が全ての行事で同じことに取り組む必要はない。全員参加を強制すれば、住民の負担になってしまい、単なる「イベント疲れ」で終わる危険性もはらんでいる。各人がそれぞれ

の状況に応じてできる範囲で取り組むことを許容し、最終的に地区住民が何らかの方法で関わることができるような仕組みが必要である。

そこで全地区的な組織である清流の郷委員会がいかに関与するかがこれからの課題となってくる。清流の郷委員会は地区内の老人クラブや婦人会、育成会、神楽保存会などの住民組織や、ものずき会といった任意団体の他、世代や性別ごとのグループにも目を向けて、それぞれの団体の意見をくみ上げ、柔軟に各行事に取り組める仕組みをつくる役割を担う必要がある。とくに、地区住民は各種団体に重複して所属しており、団体間の連携もとりやすいと考えられる。このようにして清流の郷委員会が各組織やグループをとりまとめることでより多くの住民の参加と事業の多様化を図ることが期待できる。

また、「ただ交流するだけでなく、なにか具体的な成果がほしい」という声も聞かれる。このことから活性化の到達点を提示し、各事業が目的を達成するためのいかなる手段であるのかといった位置づけを可視化することが必要といえる。そして目的を3主体で共有せねば、地区住民が各事業の実施を通じて一時的な達成感を得ることができても、一過性のものとなってしまいかねない。大学側は学生のインターンを通じた参画であることから、学生の教育を目標にしているし、行政側の中心である農村文明塾は様々な助成金や交付金に関するプロジェクトベースの活動であることから、活性化が前提にあるものの年度計画に則した事業遂行に追われることもある。主体毎の立場と抱える事情の違いを念頭に、地区住民が主導して目的に応じた各主体の役割分担をしていくことが求められる。対象地域にどれだけコミットできたとしても、大学、または行政も外部者でしかない。今後は手段と目的を定め、まず内部者となる地区住民が主導するなかで各人の事情に応じて役割を

明確化し、不足するところを大学や行政側が補完していく体制が必要となるであろう。

【付記】

本稿の作成に際して、糠千地区、木島平村役場、農村文明塾、早稲田大学社会連携推進室の皆様には多大なる御協力を賜りました。末筆ながら以上を記して感謝を申し上げます。本稿は馬場が2014年1月に金沢大学人間社会学域地域創造学類に提出した卒業論文を、吉田が加筆・修正したものである。ほとんどの現地調査を馬場が単独で行い、吉田も現地に赴き補完的に調査した。

注

- 1) 本稿で使用する「地域づくり」の指し示す範囲は宮口（2000）に依拠して記述する。
- 2) 2010年国勢調査による。
- 3) 役場提供資料による。
- 4) 2010年国勢調査による。
- 5) 住民基本台帳による。
- 6) 内訳は千ノ平組、下浦組、中浦組、浦山組、向浦組の五つである。
- 7) 糠千地区の神楽は一般的な雄獅子ではなく雌獅子である。
- 8) このモデル事業では、「これらの「多様な主体の参加」を基盤として、農村地域の再生を、日本の原文化である「稲作を中心とした農耕文化」を切り口に探り、これらの具体化を「連携による活力のある地域づくり」として目指すための連携組織の設立」（国土交通省都市・地域整備局企画課、2005）を目的としている。
- 9) 木島平村農村型産業推進協議会規約による。
- 10) 2009年から「木島平米プロジェクト会議」が加わり、六つの部会となった。
- 11) 2008年の時点では2009年新設予定となっており、2010年2月「農村文明塾運営委員会」に名称を変えて設置された。
- 12) 長野県木島平村が主催し、共催として長野県、長野県教育委員会、東京都調布市、木島平村農村交流型産業推進協議会が参加した。
- 13) また、このフォーラムでは『「農村文明」の創生を、農山村と都市双方の住民、国・地方自治体、民間組織、さらには教育研究機関などの多様な主体の連携による全国運動として、力強く推進する』（「農山村交流全国フォーラム in 木島平」フォーラム宣言）ことが宣言された。
- 14) 「農村文明」とは、「日本の農山村が有する食料生産、水源涵養、癒しの場といった多面的な機能に加え、稲作を中心に森と水の循環系を守りつつ、自然と共生して農耕生活を行う中で営々と築いてきた歴史的、文化的、教育的な価値、さらには地域で支え合う地域自治機能といった価値や機能を時代に即してさらに磨きをかけ、質の高いものに昇華させた自然と共存可能な持続型の文明」（木島平村農村交流型産業推進協議会、2010）と定義されている。
- 15) 地域おこし協力隊とは、人口減少や高齢化等の進捗が著しい地域において、地域外の人材を積極的に誘致し、その定住・定着を図ることで、地域力の維持・強化を図っていくことを目的とする取り組みで、2009年に総務省によって制度化された。木島平村では2009年から地域おこし協力隊の受け入れをはじめ、2013年12月現在5人の地域おこし協力隊が村内で活動している。
- 16) コンソーシアムとは企業連合や資本連合という意味で、個別の取り組みではなく、様々な組織が集まってより有効な取り組みを行うことである。
- 17) 宮口侗廸氏が提唱したもので、集落内に喫茶店や居酒屋などをつくり、地区住民や外部の人との交流の機会を増やす目的がある。
- 18) 高齢化を念頭においた活動とは異なる経緯となっている。
- 19) これ以前に糠千地区では、現在の「糠千そばまつり」の前身となる「謙信そばまつり」という行事が行われていた。1987年12月に糠千区民の有志で「ふるさと事業実行委員」を組織し、翌1988年のから約10年間続いたが、中心となっていたメンバーの高齢化や人手不足によって途絶えてしまった。これをものずき会で引き継ぐことになったのである。
- 20) 2013年から10月にも落水するようになり、秋のそばまつりはそれに合わせて行われた。
- 21) 非ものずき会会員でもそばまつりの手伝いに参加する者もいる（表5）。こうした人々のなかには「普段は仕事で忙しく、ものずき会の活動には参加できないが、興味はある」という人もいる。
- 22) 主に飲食代や公民館使用料、民泊受け入れ世帯への謝礼である。
- 23) 農村文明塾からの補助で十分だったために使用されず、「清流の郷委員会」で積み立てることになった。
- 24) 馬曲地区では、早稲田大学のプロフェッショナルズ・ワークショップに参加した学生が馬曲区民として村民運動会に参加した。

- 25) こうした視察や「域学連携」協定に関する活動のための交通費や宿泊費は、文明塾を通じて総務省の「域学連携」地域活力創出モデル実証事業からの補助金によって支援されている。「域学連携」地域づくりとは、大学生と大学教員が地域の現場に入り、地域の住民やNPO等とともに、地域の課題解決又は地域づくりに継続的に取り組み、地域の活性化及び地域の人材育成に資する活動である。総務省では、2012年度から「域学連携」による地域づくり活動の推進を目的に、このような活動に取り組む地域や大学の支援を行っている。
- 26) 上千石地区、千石地区、原大沢地区の3地区の総称である。

文 献

- 岡橋秀典 (1988) : 新過疎時代の山村問題. 地理科学, 43, 169-176.
- 木島平村 (1995) : 『自然劇場 きじまだら 木島平村第4次振興計画』木島平村総務課企画開発室.
- 木島平村 (2005) : 『第5次総合振興計画-ほっと・もっと・ずっと・自然劇場きじま平-』木島平村総務課村づくり推進室企画情報係.
- 木島平村農村交流型産業推進協議会 (2010) : 『「農村文明」創生プログラム』木島平村農村交流型産業推進協議会.
- 金 科哲 (2000) : 過疎地域における従属的地域構造の形成過程と内生的住民組織の変容-長野県下伊那郡浪合村を事例に-. 人文地理, 52, 28-50.
- 国土交通省都市・地域整備局企画課 (2005) : 『平成16年度 多様な主体の参加と連携による活力のある地域づくりモデル事業 長野県木島平村「都市と農村の連携による日本農村文化再生塾の設立を目指して」-多様な主体の参加と連携による村民のための日本農村文化再生塾とシンクタンクづくり-報告書』国土交通省都市・地域整備局企画課.
- 作野広和 (2006) : 中山間地域における地域問題と集落の対応. 経済地理学年報, 52, 264-282.
- 佐久間康富・図司直也・筒井一伸・海老原雄紀 (2011) : 都市農村交流における主体間関係の整理ツールの開発-福島県川俣町における地域づくりインターン事業からの検討-. 農村計画学会誌, 29, 473-481.
- 佐藤正志 (2012) : 市町村合併下での非営利組織によるまちづくり事業の継承-鳥取県旧鹿野町の事例-. 経済地理年報, 58, 198-218.
- 椎川 忍 (2011) : 『緑の分権改革-あるものを生かす地域力創造-』学芸出版社.
- 筒井一伸 (1999) : 中国地方の過疎山村における一地域振興の実態分析-内発的発展論におけるチェックポイントを用いて-. 人文地理, 51, 87-103.
- 中條曉仁 (2003) : 過疎山村における高齢者の生活維持メカニズム-鳥取県石見町を事例として-. 地理学評論, 76, 979-1000.
- 中山昭則 (2000) : 自然休養村事業による観光振興と地域の活性化-山形県飯豊町中津川地区を例として-. 人文地理, 52, 372-384.
- 西野寿章 (1998) : 『山村地域開発論』大明堂.
- 夫 恵真・金 科哲 (2010) : 過疎山村における住民組織の自治機能の維持-広島県安芸高田市川根地区を事例に-. 人文地理, 62, 36-50.
- 宮口侗迪 (2000) : 『地域づくり-創造への歩み』古今書院.
- 宮口侗迪・木下 勇・佐久間康富・筒井一伸 (2010) : 『若者と地域をつくる 地域づくりインターンに学ぶ学生と農山村の協働』原書房.
- 安田喜憲 (2009) : 『稲作漁撈文明-長江文明から弥生文化へ-』雄山閣.
- 吉田行宏 (2007) : 過疎山村における地域開発事業の展開と地域環境の改変-石川県白峰村西山地区の事例から-. 村落社会研究ジャーナル, 14, 23-34.